

時々、思いがけない所から「通信読みました」などと声があると、「どこで入手されたのですか？」などと、つい聞き返してしまします。

これまで身近な方々に伝えることが目的だった通信でしたが、最近研修会等で小さなたねを紹介することもあり、私たちの取り組みを知って下



新年を迎え、皆様におかれましては、思いを新たに過ごしておられることと思います。

この「たね通信」は、今号No12で1周年となります。私自身は通信を通して、思いの丈を自由に書かせて頂いています。じっくりとお話をするとは、なかなか出来ませんので、子どもたちから教えられること、これから取り組みたいこと等々、伝えたい事柄をここに書いてきました。毎月の印刷部数は200部程で、にのさかクリニック（30部）、小さなたね利用者（120部）、またボランティア関係者（50部）という具合のコアな通信です。

時々、思いがけない所から「通信読みました」などと声があると、「どこで入手されたのですか？」などと、つい聞き返してしまします。

寒中見舞い申し上げます

所長 水野 英尚



小さなたねの物語が描かれたステンドグラス（ガラスアート TAKAMI 製作・寄贈）

たねナースのつづやき

12月23日、たねクリスマス会&餅つきがおこなわれました。たくさんの方々のご参加、ありがとうございました。

今年はミニコンサート、マジックなどに加え、ボランティアの方々による豚汁・たくさんの種類のつきたて餅の振る舞いに、心温まりました。そして、子どもたちには手作りマフラーのプレゼント!! お渡しすると欲しかったー かわいい♡と嬉しい言葉を頂き、その後すぐに「来年はどんなクリスマス会にしよう」と始めるスタッフ一同。

皆さんの嬉しそうな顔や言葉が、たねの原動力であると感じました。（羽太）



医療法人にのさかクリニック

地域生活ケアセンター 小さなたね

〒814-0172 福岡市早良区梅林 6-23-3

電話 092-874-3051 FAX 092-874-3052

E-mail: chisanatanetane@tune.ocn.jp

ブログ: <http://chisanatanetane.blog.ocn.ne.jp/blog/>

後記

紙面作成のEです。息子（重心障がい児）と過ごす中で、たくさんの方から親切を受けます。そんなとき私が心がけているのは、「ありがとうございます」ということ。これがつい「すみません」と出てしまうのです。私が恐縮するよりも、「ありがとう」のほうが先方も嬉しく受け止めてくださると思うし、私も気持ちが前向きになれる。そして下の子にも、お兄ちゃんと一緒だとたくさんの優しさで出会えると感じてほしい。今年もよろしくお願いいたします。（E）

生命といのちを考える

ある重い障がいを負ったお子さんの容体が急変し、病院へ救急搬送となったとき、そのお母さんが「今回の入院は、その（死）覚悟を決めていました」と言われまして。人工呼吸器など「生命維持装置」と呼ばれる医療機器の助けを受けながら生活する重い障がいのある人たちとその家族は、常に「死」が隣り合せにありますが。それは、「いのち」と常に向き合いながら生活しているということだと言えます。

ここで、「生命」と「いのち」ということについて、考えてみたいと思います。先に「生命維持装置」と使いましたが、まさに医学では、呼吸を繰り返し、心臓の鼓動により全身に酸素を送り続けることにより、「生命」を維持していると考えられるでしょう。それは、モニターに映し出される波形や数値にデータ化し、具体的に見ることも出来ます。私たちはその具体としての「生命」によって確かに生きていて、家族や社会と繋がりを持つことが出来ます。

ところが、人が生きるというとき、その「生命」だけ

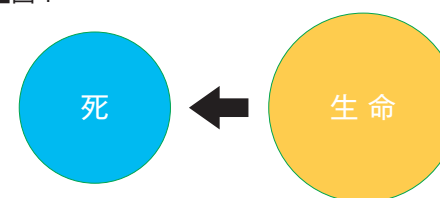
ではないように私は考えています。それは具体として見ることの出来ない「いのち」というものです。では、その「いのち」とはどのようなものなのでしょうか。まず、生と死について考えてみたいと思います。

人は年老いて、やがて死を迎えます。それは、誰も例外はありません。そうであるがゆえ、図1のように生が死に向かっていくように考えてしまふのではないのでしょうか。

しかし、重い障がいのある子どもたちや、その家族と接していますと、生きることと死ぬことは、そんなにかけ離れていないように感じます。つまり、生と死は離れているのではなく、生の中に死は内包されている（図2）のではないかと思うのです。

そして、死が内包されている

■図1



たね特別企画のご案内

アイルランドの ミニコンサート

出演：守安功・守安雅子

2014年2月1日（土）

開演 11：00～



昨年、にのさかクリニック2Fホールで、アイルランド、イギリスの伝統音楽を感動的に演奏して下さった、守安功さん・雅子さんのお二人が、アンコール企画として、同日同ホールでコンサートを開催予定です。今回、小さなたねでもミニコンサートとして、子どもたちのために演奏をして下さいます。



いのちを受けとめるまちづくり

— かあさんの家、そしてボランティア —

12月14日 福岡国際会議場

講演者

- ・ NPO法人ホームホスピス宮崎・理事長 市原美穂
(住み慣れた場所で最期まで安心して暮らせるまちづくりを推進されています)
- ・ 在宅ホスピスボランティアの会「手と手」をはじめ各ボランティア団体の代表の方々

“人生の幕を閉じる時”をいかに過ごすかについて、貴重なお話を聞くことができました。特に印象に残ったのが、紹介されたスライドの一つで、住み慣れた自宅で家族に見守られながら人生の幕を下ろしたいと希望されていた方の最期の一場面でした。ご本人を中心に、そばでお孫さんが楽器の演奏をして、ご本人の子どもさんが笑顔で見守っていらっしゃるお写真でした。このご家族の方々はご本人の希望どおりに看取ることができ、その後は晴れ晴れとした気持ちだったとのことでした。

人が最期まで安心して暮らせるということは幸せなことであり、本人だけでなく、まわりの人々も幸せにすることができるんですね。

ただ、現状はまだまだ病院死が一般的です。家族の都合等で人生の最期を希望どおりに迎えることができないケースも多いようです。自然で安らかな終焉を迎えられるような環境づくりが重要で、それを支える医師、ボランティアの方々など地域ぐるみの連携が必要不可欠だと改めて感じました。

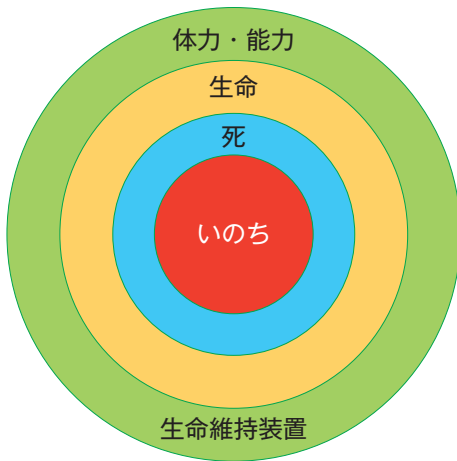
わたくしごとですが、私の父は本人の強い希望もあり自宅で自然に息をひきとりました(母談)。母には介護など大変な思いをさせてしまいましたが、最期が父の希望であった自宅でよかったと思っています。

父の葬儀の日、火葬中にたまたま私一人外に出ると、きれいな青空であったにもかかわらず、大粒の雨がパラパラと降ってきました。これは「ありがたない(ありがたうね、の意味)」と言っている父の感謝の涙だと確信し、私も空に向かって「ありがとうございました」と手を合しました。



絵：いしたに・ひかる

■図2



だけでなく、実はいくつもの層になっていて、表面には体力や能力という個人差のあるもので「生命」が覆われている、それは時に生命維持装置などの機器類でもありまます。しかし、それが削ぎ落とされれば、生命と死の向き合いとなるのです。ところが、よくよく見てみると、そこに確かな「いのち」というものがあって、それは死をもってしても決して侵されることがないのです。

出しが、人が生きる上で大切にされなければならないと思います。言うまでもなく、「生命」を守り続けていくことも重要で。しかし、誰もがやがて経験しなければならぬ死との対峙の中で、この「いのち」が本人を生かし、残された家族を生かし、地域社会を豊かにしていくのだと私は思います。自らの、そして目の前の、また隣の「いのち」に今日も向かわされていること、目を凝らしてよく見ていきたいと思っています。



Life Is Beautiful !

高橋 厚子

娘は脳性マヒ・関節拘縮症
特別支援学校中学部2年生

サプライズ



博多駅のイルミネーションを見に行きました。娘は冷たい空気を吸っただけで痰が増えるので、冬の屋外活動は、どきどきものです。

その日は、娘の体調良く、それほど寒くなく、風がなく（これ一番大事）、最高の条件だったので、思い切って出かけました。

数年振りに見るイルミネーションに、娘はずっと興奮状態で、全身コチコチに力が入り、私はそのコチコチを抜くために、娘の足をずっと上げたり下げたり。のんびり観賞とはいきませんでしたが、光に癒された時間でした。たぶん娘も。

帰り道、痰が多くなり始め、次の日まで痰吸引が増えてしまったけれど、許容範囲だったので、ほっとしました。

そんなとき、テレビから『何も起こらないというサプライズ』というセリフが聞こえてきました。コーヒーマシンのCMでした。



「うんうん。がんばったあとでも、体調を大きく崩さないってのが、最高のサプライズなんよね」と、テレビにうなずきました。
今年も、『何も起こらないというサプライズ』が、たくさん起こりますように。

絵本の紹介

誰からも慕われていたアナグマの死は、深い悲しみをもたらしました。でも、「いのち」の出来事は、そこから始まっていくことを教えてください。
大人も子ども、いのちの豊かさを味わうことの出来る一冊です。



『わすれられないおくりもの』

スーザン・バーレイ 作・絵

小川仁央 訳 （評論社、定価 1,260 円）



『100万回生きたねこ』

佐野洋子 作・絵

（講談社、定価 1,470 円）

100万回死んで、100万回生まれ変わったネコ。それまで自分本位で生きてきたが、愛する白ネコと出会い、別れでは100万回泣き、やがて自分も死んで、もはや生き返らなかつた……愛されることよりも、愛することの深さを感じさせられます。親子で、そして夫婦でどうぞ。